

城北会千葉支部会誌

第8号

平成 23(2011)年 11 月

城北会千葉支部

はじめに

昨年の城北会千葉支部総会で、尾崎英二さんの後任を仰せつかったS32年卒の斉藤徳浩（のりひろ）です。よろしく申し上げます。

尾崎さんは平成17年から5年間支部長をつとめられ、その間に幹事会体制を整えられ、千葉支部の特徴の一つである記念講演も各界から優れた方々を講師にお招きし、さらには齋藤和子さん（S29）発案による千葉支部会誌も継続され、しっかり任期をまっとうされました。大変ご苦労さまでした。

その後を継ぐのは荷が重いのですが、皆様のご支援により何とか任務を果たしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

さて、城北会という組織の意味はどこにあるのでしょうか。これは単なる同窓会でもなければ仲良しごっこでもない、四中・戸山にはすぐれた卒業生が揃っております。政界、官界、法曹界、経済界、産業界、金融界、医学界、出版界、マスコミ・報道界、作家、画家、音楽家などあらゆる分野で星のごとく活躍しておられます。そういう方々と直に話ができるところに城北会の意味があると私は思っています。我々が共に学んだ年数はわずかですが、しかしそのわずかな青春を共にしたことがきっかけとなり、その後も激しく学び続けているのが四中・戸山の同窓生です。

なかでも城北会千葉支部は、毎年の講演会、先輩インタビューなどを「会誌」で記録に残しているところが特徴です。会誌は今年ですでに8号を数えています。城北会のホームページからもアクセスできるようになっています。どうか、この城北会のよさを皆さんと共有していただくようお願いいたします。

もう一つの課題は世代交代です。これからの若い方々にも「四中・戸山は違うんだぞ」というところをご理解いただき、リベラル・アーツ、一般教養をさらに深めるために、ぜひこの場を利用していただきたいと思っています。まだ来たことのないお友達には、最初は一人ではなかなか出にくいものです。一声かけて誘ってあげてください。一度出席すれば、仲間ができ、参加して決して損はないことがわかるはずです。皆さまのご協力をお願いいたします。

平成23年11月

城北会千葉支部長 斉藤 徳浩

「思えば“アグレッシブ”に 生きてきたものだ」

城北パイラス会会長・㈱ジャパンフリーズ会長

石川 正久(S27 卒)

「パイラスクラブ」の主宰者といえば城北会で知らぬ者はない石川正久さん。その石川さんに半生記を語っていただきました。満州での生活、引き揚げの苦勞、四中への転入、果物の輸入、そして「パイラスクラブ」の設立など、我々が断片的にうかがっていた話をつないでいただきました。石川さんはご自分の性格を“アグレッシブ”とおっしゃいます。まことにそのとおりで、今も前向きで明るい人生を送っておられます。「パイラスクラブ」にてお話を伺いました。——千葉城北会

満州時代

小学校2年の時に満州へ

もともと私は東京・代々木の山谷の生まれで、昭和15年に山谷小学校に入学した。同校の先輩には、昭和天皇の玉体にメスを入れられたあの森岡恭彦（やすひこ）氏（S24 卒）がおられた。



石川正久氏（パイラスにて）

軍人だった父は昭和16年に関東軍に配属され満州に渡った。父は野砲第1連隊所属だったが、二二六事件以来軍に大幅な人事異動があり、そのあおりで野砲第1連隊の大部分が左遷されて満州に渡った。チチハルの先の一番北の寒いところへやられた。父の話だと防寒帽を被っていても、息が凍りついて眉毛がバリバリになったという。

その後、父の転勤にあわせて家族も満州に渡った。私が小学校2年の時、新京（今の長春）の小学校に転入した。

新京は理想の計画都市で、ヨーロッパの都市をまねて放射線状に道路があって、その中心に「大同広場」という周囲1キロもある大きな広場があった。その広場に面して国立満州中央銀行本店、満州電電公社本社など大きなオフィスビルが建ち並んでいた。その近くに「関東軍司令部」があった。お城のような建物だった。天井の高さは外国並みだった。

大同広場の先にまた東広場、西広場があって、そこに小学校があった。私はその「西広場小学校」に転入した。生徒の大部分は日本人だったが、クラスに一人二人白系ロシア人がいた。

父は関東軍から関東防衛軍へ

父は四中から陸軍幼年学校を経て、陸軍士官学校でロシア語を専攻し、関東軍に配属され、対ソ連の諜報関係の仕事をしていた。関東軍から関東防衛軍という別組織ができて、その司令部が奉天（今の瀋陽）にできた。家族もこれにあわせて新京から奉天に引っ越した。軍の官舎で、大きな一戸建てに住むことになった。

父は終戦の1年弱前に南支に転任になった。そのとき父は左遷だと思って自棄酒を飲んでいたが、実はこれがまことにラッキーで、大した戦闘もなく、師団参謀になって終戦を迎えた。師団長の中将だけが銃殺され、あとは参謀長以下全員無事で、一番早く内地に引き揚げてきた。我々が満州から引き揚げる半年も前のことだった。

森繁久弥が新京中央放送局のアナウンサー

新京にいたころにこんなことがあった。

夕方6時半～7時に、親子が一緒にラジオを聴く時間帯に子供向けの連続ラジオドラマがあった。森繁久弥はアナウンサーだったが、その番組のディレクターもしていた。

放送局から小学校に子役を求めてきて、兄がレギュラーで出演することになった。そのうちにもっと人数が欲しいというので私もその中に入った。当時は録音技術が乏しかったので全部生放送だった。

出演する子供たちは夕方になると眠くなる。兄が主役で出ていたドラマに、私もその他多勢の友達役で出た。兄の役名を「猿渡（さるわたり）」と聞いた。ドラマの中で、朝、数人の子供たちが家に呼びに来て、私はたった一言「猿渡く～ん」と呼ぶ役だったのに、いよいよ本番になると眠くなって「猿吉（さるきち）く～ん」と言ってしまった。それを聞いた森繁久弥が「猿渡猿吉か！」と大笑いした。ところが家に帰って両親に聞いたら「全然気づかなかった」という。他のことはみな忘れたが、それだけはいまだに忘れられない。新京時代は、まだ戦争も本格化する前ののどかな時代だった。

その新京時代の昭和16年12月8日の朝、「臨時ニュースを申し上げます。本8日未明、帝国陸海軍は西太平洋に於いて米国及び英国と戦闘状態に入れり……」という放送を聞いたことを今でも鮮明に記憶している。

撫順炭鉱へ

昭和20年、ソ連との開戦で危なくなってきたので、逃げようということになった。

当時、関東軍はまだ力があつたから列車を独占的に抑えて、それで朝鮮へ逃げようとした。そして炭鉱で有名な満州の撫順というところで終戦になった。留守家族を預かる中佐

は嫌な奴だったが、世渡り上手で目鼻が利く。その男が「家族をみな連れて内地へ帰せ」と命令を受けて、手配を素早くしてくれたので結果的にはよかった。貨車 10 両を家族のために用意してくれて、家族全員を乗せて朝鮮に向けて走らせた。

ところが朝鮮へ行く線路は 4～5 本あったがすべて満杯で、我々の乗った貨物列車も撫順で止まったきり動かなくなった。「これは長期戦だ」というのでみな撫順で降りた。撫順は大きな炭鉱の町で、日本人がたくさんいた。

炭鉱の課長クラスには今でいう団地の 2DK くらいの社宅が与えられていたが、その四畳半を、こういう事情だからみな供出してくれと、まだ軍の力が強かったから命令して、提供してもらった。その四畳半に一家族ずつ入った。

食うためには働かなくてはならない。撫順には質のいい石炭が出る炭鉱がある。普通、石炭というと濡れて重いイメージだが、ここの石炭はまさに黒ダイヤだった。軽くてピカールと光って、顔が映るようだった。マッチ一本で火が着く。その軽い石炭が自然発火して地中で燃えると、逆に重くなって銀色のコークスになる。

私もそこで石炭掘りをしていたから、仕事の合間にコークスを見つけるとそれを昼間のうちに秘密の場所に隠しておいて、冷やして、夕方、仕事が終わった時に雑嚢に入れて持ち帰った。やけどするくらい熱かった。それを母に渡して七輪に入れて火を起こすと 24 時間消えなかった。母はその火で煮物、焼き物、ご飯からおかずまで、全部煮炊きができた。ガスのない時代にこれほど高性能な燃料があったとは信じられないほどだった。

撫順炭鉱は大きなひょうたん形の露天掘りで、どれくらい広いかというと周囲には通勤用の鉄道が通っていて、駅が 4 つもあった。恐らく新宿から渋谷くらいの距離と大きさだろう。その真ん中には明治神宮ほどの大きさの池があった。

弟との死別

私の家族は、当時、父は南支へ転任して行っていたので、母と兄と私と妹と弟の 5 人だった。そこで今でも思い出すたびに涙する辛いことがあった。一番下の弟がハシカにかかり、医者もいない、薬もないので、そこで息を引き取った。当時、ハシカが流行していて 1 歳児の多くが死んだ。弟は昭和 19 年 1 月生れで、死んだのは昭和 20 年 9 月だから、まだ 1 歳半だった。泣くに泣けなかった。その弟を骨にするときに、焼場では薪を持ってこないと言われ、薪を拾い集めたことが忘れられない。

貨車から振り落とされる

撫順で終戦を迎えた。日本は敗戦だ。終戦になると日本人と中国人の立場が逆転した。例えば通勤時に客車に乗るのは中国人で、日本人は貨車ということになった。有蓋貨車は真ん中に扉があるだけで窓がない。閉め切ると真っ暗になる。

ある時、私は中が暗いので扉の外にぶら下がっていた。発車してまもなく、カンカンカンと音がする。電信柱などに接触したらしい。私は振り落とされて、線路わきに倒れた。

仲間が「マーちゃん（正久だから当時からそう呼ばれていた）が振り落とされた」と騒ぎ始めたらしいが、スピードが出ているからどうしようもない。次の駅で停車してから皆が駆けつけてくれた。私は人事不省のまま炭鉱の病院に担ぎ込まれた。幸いなことに、気がついた時には怪我一つなく、どこにも異常がなかった。家に帰ると母が「もう、炭鉱に行くのは止めてくれ」という。しかしそれでは稼げない。そこで思いついたのがモノ売りだった。

兄は読書、私はモノ売り

私たちが同居させてもらった家のご主人は撫順炭鉱の課長か課長補佐クラスだったと思うが、大変な読書家で、鴨居に届くまですべて本棚にして、そこにぎっしり本が詰まっていた。兄はそれを片っぱしから読んだ。一方、私は本には全然興味がなく、せっせとモノ売りをして歩いた。それが今日の礎になったのではないだろうか。その差が今日、二人の生活に如実に現れている。

モノ売りというのは、よく後樂園球場などで見かける首から箱を下げて売り歩くあれだ。闇市へ行ってあり金はたいてお菓子やタバコを仕入れてくる。例えば10円で買ってきたものを15円で売る。売る相手は仲間の日本人だ。私は昭和8年の生れだから、昭和21年にはまだ13歳だった。撫順での1年半はそんな生活だった。

兄も炭鉱勤務だったが、石炭掘りはしないで厚生事務所というところで働くことになり、肉体労働はしなかった。

引き揚げ、そして四中へ

いよいよ満州から引き揚げの日がやって来た。昭和21年7月末、私が普通ならば中学1年、13歳の時だった。5年間満州にいたことになる。

今から考えると、わずか5年の間に子供ながらに激動の時代を経験したことになる。

父の母校・四中に転入

母の実家は代々木にあったが空襲で丸焼けになり、父が先に南支から復員して引き揚げたのでバラックを建て、四畳半を建て増して我々を待っていた。9月からは学校へ行かなければならなかった。

代々木の家から近いのは六中（今の新宿高校）だったので、父は六中へ願書を取りにいった。すると「上のお子さんには願書をあげるが、下のおさんは小学6年生だから、願書をあげるわけにはいかない」ということだった。今考えると、これがかえって幸いした。

父は自分が四中から幼年学校へ行ったので、息子も四中に入れたかった。「我が母校はどうなっているか」と調べたら、加賀町の四中は昭和20年3月10日の空襲で丸焼け、原町小学校に間借りしているという。

父が四中に行くと、事務所では何も言わずに兄には2年2学期転入の願書、私には1年

2学期転入の願書をくれた。そのとき私は同期の5人と受けたが、全員転入できた。型どおりの試験があった。「英・数・国・漢」の4課目だった。小学校では漢文は習ってなかったが、中学生ということで漢文の試験があった。漢文の問題は菅原道真の「去年今夜侍清涼」という漢詩に「訓点（くんでん）をつけて解釈せよ」という問題だった。「訓点」の意味がわからなかったので、「まあいいや、ふり仮名をふっておこう」（キョネンノコンヤセイリョウニジス）と仮名をふって出した。

試験が終わると、転入生5人は平田巧校長に校長室に呼ばれて、何を言われるかと神妙にしていると「お前たちはあまりに出来が悪いからどうしようかと考えたが、この際、お情けで入れてやる」と言われて皆シュンとした。校長も意識的に言ったのだろう。引き揚げて間もないのにいきなり強烈パンチを喰らって「この先どうなるのだろう」と不安を覚えながらも、9月から四中に通学することになった。

私たち兄弟は学年が遅れずに済んだが、引揚者は1年遅れが普通だった。私は昭和8年生れだが、昭和6年、7年生れというのも同級生には幾人もいた。

そのうちに文部省の学校制度大改革があって、旧制中学は高等学校になり、そのかわりに間をつなぐ新制中学というのができた。だから名前も「東京都立第四高等学校併設中学校」ということになった。旧制中学卒は我々が最後で、その次の人たちは新制中学の第1回生となった。その人たちが新制中学3年を終わると、次はすでに「戸山高校」になっていた。「第四高等学校」という名前の学校経験者は、我々の学年と、その上の2学年だけで、その上はもう卒業していた。旧制高校と紛らわしいからナンバースクールでは呼ばずに名前をつけることになり、名前はそれぞれの学校に任された。誰がつけたか知らないが、たぶん戸山が原にあった陸軍の兵舎を使ったから「戸山高校」としたのだろう。

兄がストレートで東大へ、私は受験せず

そんな中でありがたかったのは、*兄がストレートで東大に入ってくれたことだ。しかも寮に入ったので金がかからなかった。駒場の2年間は寮生活だった。

四中は世間でいう進学校だったから、東大へ行くのがあたりまえ。しかし私は最初から大学受験をしなかった。「受からなかった」のではなく「受けなかった」のだ。「落ちた」のではない。そこを間違えないで欲しい。この判断は今考えても間違っていないかと思っ

*兄・石川忠久 S26年四中卒、中国文学者、文学博士、元・二松学舎大学学長、瑞宝中綬章、NHK「漢詩への誘い」など番組を担当。

商売の始まり

新宿で紙の販売

父は軍人だったから終戦で失職した。何かしなければというので、軍隊時代の部下の一

人が静岡県富士市の製紙会社の御曹司だったので、紙を分けてもらうことにした。その頃紙は品薄で引っぱりだこだった。書物に飢えていた時代で「リーダーズクラブダイジェスト」を買うのに長蛇の列ができほどだ。紙の販売のために、今の「パイラス」のある場所（新宿三丁目）を借りて使った。前に道路が出来たばかりで、その向こう側にはまだ遊郭があった。ここは地の利もいいというので、軍隊時代の部下4～5人とここで紙の販売を始めた。仕入れは金がないから借りて、焼けた跡に立てた掘立小屋のような店で紙の販売を始めた。これがそもそもの商売の始まりだった。

狭い店の二階は屋根裏部屋のようになっていて、そこに兄と私が寝泊まりして、下の四畳半には父と母と妹の三人が寝泊まりしていた。

しかし“武士の商法”で、いとも簡単に取り込み詐欺にやられてしまった。一番たくさん仕入れた日に、その商品をそっくり買ってくれたお客がいた。喜んだのも束の間、代金を払わずそのまま行方知れずになってしまった。これであっけなく倒産だ。父の部下たちは散り散りになって消えていった。

果物店に転業

これから話すことはまったくドラマのようだが本当の話だ。

ある日、店が倒産して思案にくれていた母が店の前で夕涼みをしていたところ、代々木の実家で娘時代に御用聞きに来ていた八百屋の小僧が、すでにいい親父になっていて、店の前を通りかかった。「お嬢さん、こんなところで何しているのですか？」という。母は陸軍少将の娘で“お嬢様”だった。母はびっくりして実情を話した。するとその人は「私は千駄ヶ谷で八百屋をやっています。毎日、神田の青果市場へ仕入れに行っています。ここは場所がいいから水菓子屋（果実店）をやりなさい。私が仕入れてあげますから、千駄ヶ谷の私の店まで取りに来てください。ここまで廻る余裕はないので」という話だった。八百屋さんは3輪トラックで神田市場まで仕入れに行き、千駄ヶ谷の店まで運ぶ。そこから兄と私二人で古いリヤカーを引いて取ってくる。リンゴやミカンを積んで持ち帰って、戸板に並べて売った。それが果物店のそもそもの始まりだった。

うまい具合に、夜、道の向こうから遊郭の女性たちが客を連れて果物を買いに来る。まだ当時は果物など珍しい時代だった。よく聞くと、遊郭の女性たちは貧しい家の娘だったり、売られてきたり、気の毒な身の上ばかりだった。少し稼ぐと贅沢をしたくなる。だからどんどん売れた。「いらっしゃい、いらっしゃい」と、面白いようによく売れた。そのうちに、少しは店らしくしようと大工を呼んで台をつくって果実をきれいに並べた。リンゴは赤、ミカンは黄色、偏らないように、華やかに、その配色をうまく考えながら陳列した。

店の名前をどうしようかということになったとき、母が「将来栄えるように、最初は双葉から始めよう」「漢字では読みにくいのでカタカナにしよう」というので、「フタバ果実店」とすることにした。現在、このビルを「FBビル」というのは「フタバ」から取ったものだ。

自転車でレモンを配達

私は性格がアグレッシブなので夕方からだけの商売では面白くない。昼間がもったいない。そこで考えたのが昼間売りに歩くことだった。当時、バーができ始めたばかりで、ハイボールとか、ジンフィーズがはやった。このジンフィーズには必ずレモンがいる。今のような薄切りレモンではなく、半分に切って、気前よくスクワッシュして使っていた。

クリスマスの時期になると今でも思い出すが、アメリカからくるレモンは大玉で300個、小玉で360個入っている。その箱を一晩で25~30箱、自転車で新宿じゅう売りまくった。当時はお客の方も明け方までよく飲んでいて、レモンが足りなくなると「マーちゃん、レモンを早く持って来て」と、また配達だ。寝る間がなかった。朝まで売り歩いた。

金が足りなくて苦勞したこともあった。しかし当時の銀行は、私のような陽気な性格で「忙しくてしょうがない。仕入れに金足りないから貸してくれないか」というと簡単に貸してくれた。

母がノイローゼに

我が家の家系はみな軍人だった。軍人の息子は軍人にする。軍人の娘は軍人のところに嫁にやる。同期生はお互いに自分の息子や娘をくっつけようとする。現に、私の兄嫁は私の父の同期生の娘だ。商売をやっている者は我が家系には誰ひとりいない。私だけだ。母方の家系もみな軍人で、祖父は少将。伯母たちのつれあいや親戚には中将が3人、大将も一人いた。

その大将は祖母の伯父で柴五郎といった。歴史の教科書にも載っている。1900年（明治33年）5月の「義和団事件」で北京の各国大使館が包囲されて籠城したときに、北京周辺の事情に一番詳しくあった柴五郎が連合国のリーダー格となって義和団を鎮圧した。そのときの功績が評価されて後に陸軍大将になった。会津出身で大将になったのは初めてだった。戊辰戦争（1868~1869年）の時、会津藩は逆賊だった。みな自決して、残った者も皆殺された。その中で柴家は生き残った。薩長以外から大将が出たのはこの時が初めてで、本にも多く書かれている。会津の人はみな「柴五郎は“我が故郷の英雄”」だと今でも思っている。

母は生前、叔母達から「知子さん、いつまでマーちゃんにあんなことさせているの？」と口癖のように言われて泣かされていた。「一族の恥だ」とまで言われた。

もともと私は商売が好きだったから何の苦勞もなかったが、母は私のことでノイローゼになってしまった。上の息子がストレートで東大に入ったことは自慢でもあったが、下の息子はひたすら果物を売り歩いている。しかも自分は下の息子に“ディペンドオン”せざるを得ない、というので母は精神的に病んでしまった。

医者に聞くと、転地療養しかない。お店のことなどをいっさい考えさせない環境にしないと治らないという。

三浦半島の先の方に、走水（はしりみず）というところがある。人の紹介で母はそこに

転地療養することにした。離れが空いているというのでそこを借りて、毎月食費を送った。母も知らないところで一人暮らしだから大変だったと思う。

長期療養して、また帰ってきて療養して、亡くなるまで莫大な費用がかかった。母が元気でいてくれたら、私の人生も相当に違っていたはずだ。

ケーキ屋を対象にイチゴ販売

レモンの次に、こんどはイチゴのニーズが高まってきた。食生活が豊かになるにつれ、ケーキ屋が増えてきたころだった。ショートケーキには必ずイチゴが必要だ。一年中イチゴが欲しいという。そこで私は閃いた。「よし、カリフォルニアだ!」。カリフォルニアは常春の国、一年中イチゴが出来るはずだ。幸いなことに、私が結婚する前に私の妻の姉が結婚していて、その主人が安宅産業のサンフランシスコ駐在だったので情報を集めてもらった。イチゴはいくらでもあるらしい。「よし、見に行こう」というのではるばるカリフォルニアまで出かけていった。そうしたら本当に常春の国だ。まさにイチゴには絶好だ。「よし、輸入しよう」と考えた時に、ちょうどまい具合に、日本航空に対抗させて、貨物便専用の「日本貨物航空（NCAニホン・カーゴ・エアライン）」という会社が立ち上がった。陸運の日本通運と海運会社何社かが共同出資してできた。

日本航空が扱っていたエアカーゴの主要な荷物は手紙だった。エアカーゴの最大の得意先は郵便だった。

ところがイチゴとなるとものすごく重量がある。航空貨物といえば重さでかせぐビジネスだから、航空会社はイチゴに飛びついた。そこで、ほぼ正方形の、フォークリフトが入るパレットをアメリカでつくらせた。一つのトレイに左右6個ずつバスケットが入る。1トレイが1ダース。最初は72トレイで1パレット、そのうちに84トレイ、96トレイと増やしていった。最盛期には、70~80パレットを私一人で輸入した。日本に着いた後は、関西にも、九州にもと、それこそ全国のケーキ屋さん販売した。

「ジャパンプレーズ」を設立

昭和56年に、株式会社「ジャパンプレーズ」を設立した。プレーズはフランス語で「フレッセ」でイチゴ。それを英語読みにした。

シーズンごとにカリフォルニアに通っていたが、「いちいち通ってられない」と、サンフランシスコの郊外の高台に家を買った。それからは滞在期間が月単位になった。アメリカ人と肌で接したから、アメリカという国がよくわかった。

サンノゼから南へイチゴの最大生産地であるワッソンビルまでクルマで毎日走って、ブロックイングリッシュで買い付けた。幸いなことに、3分の1以上が日系二世だった。当時の二世は日本語が上手で、むしろ英語の方が下手だった。だから日本語でほとんど話が通じた。

昭和30年代の初め頃だったから私がまだ20代後半、つまり20代で輸入を始めたわけだ。

当時、安宅産業にいた義兄も会社を辞めて独立して手伝ってくれた。彼が知っている小回りの効く商社をいくつか紹介してくれて、それがうまくいった。

当時、通関手続きを一部日通に頼んだところもあるが、ほとんど自分でやった。当時の私は物おじしなかった。大雑把な人間だが、大雑把がいい場合がある。あまり恐れない、計算しない、行動あるのみだ。

需要があるから輸入する、輸入すれば売り歩く、売り歩くと次々とケーキ屋に得意先が出来る。ケーキ屋は徒弟制度で、教え子が独立するとまたケーキ屋が出来る。だから枝葉のように得意先が増えていく。そんなことで次々と事業は拡大していった。

いま考えて一番よかったと思うことは、商売を誰にも教わらなかったことだ。だから「こうしなければいけない」という束縛もなく、自分の思うとおりのことができた。

私には女、女、男と3人子供がいるが、アメリカに家があったから、全員アメリカの学校へ行かせた。長女はその後日本に帰って、いま、うちの会社の社長をやっている。二女はうちの仕事とは全く離れて、結婚して、いまもアメリカにいる。息子は輸出を覚えて、向こうで輸出会社をつくってやっている。

私はカリフォルニアにベースを置いて、アメリカというものを知った。まず、住みよい、商売しやすい、非常にオープンな国だ。日本のようなしがらみはなにもない。だからあれだけ栄えたのだらうと思う。アメリカという国は、もともとアメリカ人という人種はいなかった。世界中いろいろなところから集まってきてアメリカ人になった。そういう国とお付き合いして、私もいい経験をした。

生涯最高の喜び「パイラス会」

私のいままでの中で最高の決断だったと思うのは、進学をしなかったことだ。冗談で「俺が受けていたら、お前が落ちていただろうな」といって笑っている。

私は小学校時代、何回も転校しているが、どこへ行っても一番だった。それが四中へ入ったらさっぱりだった。できる奴がいっぱいいるのには驚いた。

我々の時期は学校制度が変わって、在学中に旧制が新制になった。これはめずらしい体験だった。我々の学年は入学した時は四中だったのが、卒業するときは戸山高校だった。

四中は甲乙丙丁戊と5クラスだったのが、学校制度が変わって1学年400人体制ABC……の8クラスになった。当然のことながら、3クラス分は他から入ってきた。そのよそから来た連中が優秀だった。東大に入った者は転校組の方が多かった。

新制になるときに新しい校舎が戸山に決まった。練兵隊の馬小屋を校舎に改造したものだ。「馬小屋でも何でもいい、いままでの間借りよりはいい、一緒になれるなら」と思っていたら、まもなく火事になって、馬小屋校舎は焼けてしまった。「馬小屋だから焼けてよかった」という者もいた。それでまた分散した。だから、我々はいっとき4つの小学校に分散した。火つけがあったという説もあるが、真相はわからない。

「パイラス」はなぜ結束が強いのか

戸山高校になったとき外様が増えたということは、仲間意識が分散するという懸念があった。

いよいよ卒業すると、ご多分にもれず、どこのクラスもクラス会を始めた。特に問題だったのは、2階がA B C D組で、1階がE F G H組だったので、1階と2階の交流が少なかつたために、お互いに疎遠なまま卒業してしまったことだ。

そこで、私はいち早く各クラスのキーマンを呼んで「せっかく旧制四中から新制戸山高校まで6年間一緒に過ごしたのだから、クラス会はやめて、同期会一本にしようではないか」と提案した。「もちろん、転入組もいっしょだ。『同期一本の会』を定期的にやろう。すると皆が「それがいい、そうしよう」と乗ってくれた。

次にネーミングの段になった。そのときに、誰が云ったか忘れたが「我々、四中を校章の形から『パイチュー』と呼んでいた。そのラストだから『パイラス会』でどうだ」という。「そうだ、それだ！」パイチューのラストだから「パイラス」だ。これは一も二もなく、満場一致で決まりだった。

その経緯は「パイラス会3部作」の本の第1部に載っている。「タイムスリップ1949、2±3」、これがバカ受けした。そこで第2部をつくった。そのころにはみな勤め始めていたので「何かコメントを書け」といって書かせた。装丁、レイアウトは、唯一、芸大を出た渡辺恂三という京都市立芸大の教授で、現在京都に住んでいる画家にやってもらった。

副会長で、一昨年亡くなった原田清が製本会社をやっていて、彼がこういうことに長けていた。パイラス組は人材豊富だ。名前に通し番号を付けた。「みな、番号を付けたから、一生忘れるな」といってある。私は44番だ。私の一番の願いは、城北会のメンバーにこの三部作を読んでもらうことだ。皆さんにもぜひ読んでいただきたい。

考えてみれば、5クラス250人にプラス3クラス150人で400人。何もなければ他人同士だ。それを私が「クラス会をするな！すべてパイラス一本にしよう」と大号令をかけた。「そのかわり四六時中集まれる場所を私が提供しよう」といってつくったのが、この「パイラスクラブ」だ。

1年上の兄の学年には、このようなアグレッシブな人間がいない。だから何かと言うと私の学年と一緒にやろうとする。私は結構なことだと思っている。1年上の学年から体調不良で休学して降りてきた者が何人かいる。その者たちが接着剤になっている。

我が人生に悔いなし

我が人生、いま思えば楽しかった。ラッキーだったのは、私には先生がいなかったことだ。だから束縛がなかった。何をやっても止める人がいなかった。

私はイチゴ輸入の第一号だ。日本のイチゴの倍もある大きなイチゴがアメリカからドーンと入ってくる。しかも安い。だから全国から注文がくる。すごい量だ。うちのイチゴを奪い合うようになった。だから、当然のことながら、私がアメリカへ行くのは、社員も含

めてオール只だった。「カーゴアテンダー」というわけだ。

イチゴ輸入が順調に行って、かなりのボリュームをやるようになったあるとき、カリフォルニアの生産者が「日本へ行ってみたい」という。「よし、連れて行ってやろう」と、マーちゃんが橋渡しになって大勢連れてきた。何をやっても止める人がいなかった。

「イチゴは一年中あるものだ」と皆思っているだろうが、あるようにしたのはこの私だ。一つの事業を立ち上げたということが幸せだった。「ショートケーキは必ずイチゴをのせる。だから一年中イチゴが必要だ。その元をつくったのは私だ」と思うだけで幸せだ。

振り返ってみて、たいして成功したわけではないが悔いもない。

「マーちゃん」が「マーチャント」になった。幸せな人生だったと、そろそろそう思ってもいいかな。

◆取材メモ 平成23年4月2日 パイラスにて

取材参加者：尾崎英二(S31)、堀口俊一郎(S32)、志田憲一(S33)、白石治比古(S41)、
齊藤徳浩(S32)

平成 22 年度千葉城北会総会記念講演

「古代アンデスの神殿を掘る」

講師 東京大学名誉教授 大貫 良夫氏 (S31 卒)

平成 22 年 11 月 6 日 船橋グランドホテルにて

【講師プロフィール】

おおぬき よしお
大貫 良夫氏

1937 (S12) 年 6 月生れ

1956 (S31) 年 都立戸山高校卒

1960 (S35) 年 東京大学教養学部教養学科卒、文化人類学、アンデス先史学専攻

現在、東京大学名誉教授、野外民族博物館 (愛知県犬山市) リトルワールド館長

私の専門は考古学で、長年アンデスの神殿を掘っています。今日は千葉城北会からご要請がありましたのでやってまいりました。これまでにわかったことを皆さんにも知っていたらこうと、こういう機会があればいつでも喜んでまいります。

さて、南米ペルーの古代アンデスの研究というのは、日本では 1958 年に調査隊が派遣されたあたりから始まっています。私は 1960 年に大学を卒業し、そのときからこういう調査に参加させていただいておりますので、もう 50 年も続けていることになります。

1990 年頃からはクントゥル・ワシ付近に毎年のように行っております。季節でいうと 7 月から 10 月にかけて行きますので、ペルーは大変に気候がよく、湿度が 10% 以下、快晴微風ですから、長袖でちょうどいいくらいです。向こうにおりますと、日本の夏の暑さを忘れてしまうほどです。

古代アンデスの研究は私の先生である泉先生のときから始まっています。遺跡の中でも一貫して神殿を掘っています。「アンデス文明の起源を求めて」という大きなテーマに向い、その形成期と言われる時代の神殿を中心に、社会がどのように形成されていったか、紀元前 800~1000 年くらいのところを調べています。

なぜ神殿かというと、神殿を中心に社会がまとまり、大文明へと発展していったと思われるからです。私どもは文明の形成期という時代を掘っているわけです。そうすると神殿を中心とした宗教活動などいろいろなことがわかってきます。

インカ帝国の謎

アンデス文明というのは南米ペルーを中心としておりますので、そのペルーについてお話しておきます。

ペルーといえば皆さんよくご存じなのがマチュピチュです。もちろん世界遺産に登録されています。日本人の間では世界遺産のなかでどこへ行きたいかというところ、マチュピチュがトップに上がってくるほど人気があります。世界中の人が注目していて、いつ行っても人が大勢います。30年ほど前までは静かだったのですが、最近ではいつ行ってもいっぱいです。



記念講演中の
大貫良夫氏

マチュピチュを見下ろすワイナピチュの山に登るには、石をしきつめた道を通って息切れがするほどたくさんの階段を登ることになります。頂上まで行くことができます。ところが降りるときが大変です。降りる方が怖いですから、最近はあまりたくさん人が来ないように入場制限をしています。

マチュピチュに行こうとすると、インカ帝国の首都があったクスコを通らなければなりません。クスコに一泊二泊してインカ帝国の遺跡を見るわけですから、クスコはいまや大観光都市です。

そのクスコの裏の方にサクサイワマンという、石だけでできた砦があります。その石は広いところでは3段3列あり、左右に幅が300mから500mくらいあります。全体の石の量たるや膨大なもので、その重量を考えるだけで想像を絶するものがあります。一体どうやって動かしたのか、どうやってこのような石を削って、うまく合わせて、緩みのないようしっかり組んだのか、いまだに謎であります。紐をかけて押したり引っばったり、それをさらに持ち上げたり立ち上げたり、その上にまた積み上げたりしていますので、一体どのようにしてつくったのかまったくわかりません。

我々も神殿を復元してみようと、いくつかの石を持ってきて、壁に持ち上げたりしたことがあるのですが、とても重くてできませんでした。私が立っているこの演台くらいの大

きさの石だったら、30 人かかってもやっと持ちあがるかどうか、たぶん無理でしょう。ピ
アノくらいになったらもう駄目です。40~50 人かかってもやっと動くかどうか、それくら
いの重さがあります。それをわざわざ不規則な形にして、しかもある方向に揃えて行く
というとんでもない仕事をしているわけです。

インカ帝国というのは、だいたい日本の戦国時代に栄えた国ですが、1533 年スペイン人
によってあつというまに滅ぼされてしまいます。

アンデス文明とメキシコのアステカやマヤなどの文明とを合わせて「新大陸文明」とい
いますが、この新大陸文明には鉄がありませんでした。アンデス文明の方は青銅器までは
つくっておりますが、鉄器はとうとうつくらないままに終わっています。それから家畜が
ありません。少なくとも牛や馬といった大型の家畜はいません。また、車、つまり荷車の
ようなものもありません。

鉄もなし、車もなし、大型の家畜もなし、そうするとそれらの力なり道具をいっさい使
わずにこのようなものをいかにしてつくったのか、ますます謎が深まるばかりです。

私の先輩で清水建設の重役をされた方に写真を見せて「もし、清水建設に発注したらど
うなりますか」と聞いたら、「そんなものできっこないよ。トレーラーを通すにしても、ま
ず、道をつくらなければならない。鉄の道具もない、何もなしでできるわけがない」とお
っしゃっていました。「でも、つくってあるじゃないですか」と私は反発したことがありま
す。それくらい、現代にもってきても難しいことです。

今日わかっているインカ帝国は、北は赤道を越えてエクアドルとコロンビアの国境をち
よつと越えたあたりから、南はチリのサンチャゴのさらに南の方にまで広がっています。
距離にすると南北 4000 km から 5000 km くらいあります。東西はそれ程でもないですが、
南北のこの距離はヨーロッパ大陸に当てはめてみると、モスクワからスペインのジブラ
タル海峡あたりまで、アジアでいえば北京からサイゴン、今のホーチミン市あたりまでに
なりますから、そう考えると巨大な国家があったこととなります。南北の長さでは世界最
大の国家であったかもしれません。

マチュピチュに代表されるように、一般的にはペルーは山ばかりだと思われていますが、
実際には太平洋に面した国であります。海岸線に沿った海拔の低い砂漠が広がっています。
海拔ゼロから、高くてもせいぜい 500m くらいの低い土地が続いています。例のナスカの地
上絵もこういう低地の砂漠のなかにあります。

そこからさらに内陸に入りますと、こんどは急激に土地が高まって稜線が霞むほどのア
ンデス山脈になります。雪に覆われた山頂の高いところでは海拔 6000m にもなります。ア
ンデス山脈は北の方は幅が狭く、南に行くほど幅が広がっています。

それを越えるとこんどは高度がどんどん下がり、同時に雨が多くなって熱帯雨林の環境
になります。アマゾン川の上流地帯になり、ここはジャングルです。

ですから、アンデス文明というのは、太平洋沿岸にそった低地の砂漠から東に向かって、
複雑な地形のアンデス山脈の高地になり、さらにその東側はジャングルで、国土の面積の

半分くらいはジャングルになっています。ペルーはこのコスタ・シエラ・セルバという三つの環境からなっています。アンデス文明はこのうちのコスタとシエラ、山と海岸、この二つを中心にできた歴史があります。この二つの環境を中心に発達してきました。

ペルー略図



アンデスの食糧

このような環境の中で、アンデス人は 16 世紀までの間に農業を発達させ、食糧を生産して生活してきました。どういう食糧をつくっていたかという、穀類として代表は何と言ってもトウモロコシです。

トウモロコシは色も形も違ういろいろな種類があります。紫色の黒っぽいトウモロコシもあります。これはそのまま食べるというよりも、これを煮出して、その汁に砂糖や果物を入れて清涼飲料水にします。

そのほか雑穀としてはキノア、カニワ、キウィッチャといったものがあります。カニワとかキウィッチャは日本ではほとんどつくっていませんが、キノアは植物学的にはアカザという、戦後の東京の真ん中で、焼け跡にたくさん生えていた雑草の仲間です。その実はタンパク質に富んだ食糧で、いまだにアンデスではたくさんつくられており、日本でもいまペルーの物産を売るような店が東京にもありますが、そういうところが輸入して売っています。非常に滋養に富んだ雑穀です。

キウィッチャは日本では仙人穀、アマランサスとあって、先日、岩手県北上市の土産店に入ったらくさん売っていて「これはなんだ、キウィッチャじゃないか」と思って、思わず二つ三つ買いました。家に帰って、試しにと思って普通のお米にそれを一掴み入れて炊いたところ、普通のお米がもち米を炊いたようになって、おいしく食べられました。

もう一つアンデス人にとって大事な食べ物はイモ類です。アンデスといえば皆さんが思い出すのはジャガイモです。そのとおりですが、ジャガイモにもいろいろ種類がありまして、日本ではほとんど食べられていません。その中に、ものすごくおいしいものがあります。日本やアメリカに来ているのは大きくて白くて水っぽいジャガイモですが、そうではなく、金時芋のように黄色でほくほくしておいしいものがあります。確かにあれを食べると、塩とジャガイモと、あとは少々トウガラシをかじれば充分で、あとは何もいらなくらいおいしいものであります。どうも私どもは戦中・戦後のひもじい思いがありますので「食事というは米だ。イモは食糧ではない。あんなものを食って仕事はできない」と偏見をもっていましたが、確かにジャガイモはいま世界中で食べられているすごい食糧です。ほかにサツマイモもあります。ジャガイモ、サツマイモはみなアンデス人が、今から 4000～5000 年も前につくり始めていたものと考えられます。それくらい古いものです。

もう一つはユカです。実はこれが一番大事なイモです。日本ではキャッサバとして知られていますが、栽培しているのは沖縄くらいでほんのわずかです。しかし日本ではこのキャッサバを大量に輸入しているようでありまして。加工用に使います。キャッサバの澱粉は発酵させてビールとかお酒とかお醤油などいろいろなところにどんどん使われています。インドネシアやタイで栽培されて、そこから輸入されています。

ペルーではユカとっていますが、アンデス全体でたくさんつくられています。「まずいお米を食べるくらいならユカの方がいい」と思うくらい、私は“ユカファン”です。

そのほかにオカとか、オユコなど、もちろん平地でもできますが、海拔 3000～4000m 近

いところでとれるおイモも開発されました。

サツマイモとかユカ（日本でキャッサバ）は本来、高度 2400mくらいが限度で、それより高い霜が降りたりするような場所では生育しませんが、ペルー人は高いところでも育つイモを見つけて、それらのイモを栽培して、それで山の上で生活を立てるようになりました。

さらにはラカッチャというイモ、ヤコンというイモ、これらも大昔からつくられています。それから食用カンナがあります。カンナというと花を見るものですが、その根っこが食べられるものもあります。ヒーカマ、マシュワ、それから日本でもよく宣伝しているマカがあります。これらは 4000m以上の高いところでつくられています。日本でいうとカブくらいの大きさのものです。マカをつくった畑は 10 年くらい使い物にならないといわれるほど、養分をすべて吸いとってしまいます。それを食べると精力がつくし、体が丈夫になるといわれています。

向こうの日本人が飼っていた犬が老いさらばえてよたよたになったので、犬にそのマカと、ウーニャ・デ・ガト（猫の爪）といわれる植物を毎日食べさせていたら、2～3週間で元気になってしまった。立ちあがって歩き出したというのです。「嘘だろう」といったが、本当にそうで、案外、精力をつけるのにはいいものかも知れません。ペルーでも「精力剤」といわれていますが、本当かどうか私も試してみましたが、こればかりはどうも、あまり効き目がなかったようです。

そのほか、豆類ですね。まず、インゲンマメです。たくさん種類があります。

驚くべきはピーナツで、4000 年くらい前から栽培されていたことが発掘でわかっています。ちゃんと殻まで出土しています。

それからカボチャです。北米から南米まで広く栽培されています。日本へはスペイン人たちが南蛮渡来として持ってきたものです。

辛みをつけるトウガラシは何百種類もあります。これもコロンブスのアメリカ発見以前は世界に知られていなかったものです。それがアメリカ発見以後、またたくまに世界に広がって、今では「これなしでは料理は成り立たない」というほどです。

野菜の中のトマト、最近知られてきたアボカドもそうです。

最近は麻薬として問題になっているコカとか、タバコも元はといえばアンデスやメキシコといった中南米でつくられていたものです。

チリモヤという果物は日本ではお目にかかりませんが、昔、たまに輸入されて「800 円」と書いてあるから、それなら食べようとしたら「100 グラム 800 円」だということです。一つのチリモヤは 1～2 キロありますので大変高価なものです。1 キロだと 8000 円ですのであきらめたことがあります。今はもっと安く売られるようになりました。

家畜としては、ヤマとアルパカというラクダ科の動物があります。これを高いところで飼育しています。

もう一つはクイという、日本ではモルモットといわれているものです。こういったものを高さに応じて栽培したり飼育したりして食べています。

それから海産物があります。ペルーの海岸は海産物の宝庫でありまして、日本料理屋にとっては大変にうれしいものです。首都リマにいくといっぱい並んでいます。新鮮な魚が毎日のように上がってきますので、冷凍になっていません。ウニもあります。昔はウニは日本人くらいしか食べなかったのが、今ではペルー人も食べます。タコもそうです。このように豊富なおいしい海産物が食べられます。

その後、スペイン人がやってきて、いい土地はすべて取ってしまいます。海岸に近い平地の人たちは早くに征服されて、病気も流行ってたくさん人が死ぬのです。スペイン人が直接支配するようになって、スペインの作物も栽培されるようになります。

いっぽう山の方は、一番辺鄙なところへ追いやられた人たちが昔の生活を維持しながら生き延びてきました。トウモロコシもできないような高いところで、そこでつくっていたのは、ジャガイモのようなイモばかりです。ですから「アンデスといえばおイモだ」ということで、おイモをつくっている人たちが伝統を守ってきている。本来はアンデスはトウモロコシではなくてジャガイモだ。「インカ帝国はジャガイモがつくったのだ」という説をなす人もおります。私の知人の植物学者もそういうことを本に書いています。

これに対して私は「それは間違っている。そんなはずがない」と言っています。考古学からいくと、ジャガイモ地帯よりももっと低いところに大きな遺跡がたくさんあり、その周りでは現在でもトウモロコシをつくっていますので、トウモロコシとユカとか、もちろんジャガイモもありましたが、「ジャガイモだからよかった」というのではなく、それらのものが全部組み合わされたもっと豊かな食生活があつて、あのような文明ができたのだと私は主張しています。いろいろ種類があつて「今日はあれにしよう、これにしよう」と選んで食事をつくっていたのだと思います。

海拔の高いところに行くと、農業がやりにくいようなところでたくさん増えたのがラクダ科の動物です。その一つがヤマという動物です。これは日本にもたくさんいます。

もう一つはアルパカという小さな動物です。肉もたべられますがウールがいい。これでセーターをつくったりします。那須高原の方に行くとアルパカ牧場ができて、たくさんアルパカを飼っているそうですが、面白い試みだと思います。

もう一つは、これはまだ半野生の状態で、飼育といっても広大な囲いのなかで飼っているビクーニャという小さな動物がいます。体長で1メートルくらい。その肉は柔らかくて上等で、インカ帝国でも皇帝くらいにしかこの肉は使われなかったと言われていました。最近これを保護してやや増えてきました。またそのウールが極上のものとされています。

何年か前に、銀座英国屋で英語にして「ビキューニャ」という洋服の生地を売っていました。1着 250 万円でした。ある政治家は 300 万円だったという人もいたらしくて、それくらい高かったのでしょう。とても我々には手が出ません。

クイというのはげっ歯類の一種で、ウサギくらいの小さな動物です。これを 5000 年くらい前から家の中で飼育していました。牧草が一番の好物で、太らせて、やがてこれに辛めの味付けをして食べるわけです。さらには揚げたうえに辛めのソースをかけて食べる。地方によって料理の仕方が違います。頭、胴体、前足、後ろ足あたりは肉がたくさんあっておいしいです。胸のあたりは食べにくいけどおいしい。食べているうちに顔のところの皮がつると剥けてネズミの骸骨のようになります。

これは今年、最初に本格的な発掘をしたコトシュ遺跡が 50 年になるのでお祝いをしたい、発掘した当時の生き残りは私一人になってしまったので来てくれというので 2 日間にわたる行事に行ってきました。2 日目のお昼は郊外の田舎のレストランへ行って、この料理をごちそうになりました。

ちなみに「この動物はネズミだからいやだ」といって食べない日本人がたくさんいます。私の妻もその一人で食べません。しかしアンデス高地ではこのようなお祝いごとなどにしばしばこの料理が出ます。ですから本当に食べられない人は、事前に「今日の料理のメインは何でしょう？」と聞く必要があります。大体、2 回に 1 回はこの料理が出ます。私は好きです。

このチリモヤというのは、ペルー内ではあまりたくさんは食べられない果物ですが、安くおいしいものです。皮をむいて、まっ白な果肉を冷やしてスプーンなどで食べますと、甘くて「木になるアイスクリーム」だと言われるくらいおいしいものです。

いま、TPP（環太平洋経済連携協定）が話し合われていますが、こういうところで日本はもっと積極的にこういうものを輸入したらいいのではないかと思います。

アンデス文明の起源を求めて

さきほどアンデスは海岸と山とジャングルと言いましたが、山の方は高度によって環境が違ってきますので、それに応じて出来るもの、出来ないものがあるので、その環境の違いを巧みに使って豊かな食糧生産をしてきたということです。

そこで、インカ帝国の前には何があったかという、海岸と山では別々の文化があり、大国家・小国家などありますが、日本に室町・平安といった時代ですね。

その少し前に、地上絵で有名なナスカなどが日本の大和朝廷の時代に繁栄しました。さらにもう少しさかのぼると日本の縄文時代になりますが、中国でいうと春秋戦国あるいはもう少し前の時代に、アンデスでは形成期の大神殿がいろいろつくられていきます。そのへんのところを目指して私たちの調査は始まりました。

南海岸のナスカの時代に、北海岸で繁栄するモチェ文化という名前のついた文化がありますが、ここでは大変に興味深い土器が出土しています。トウモロコシとか、ユカ、サツマイモ、ジャガイモなどを模してつくった土器、当時の人間の顔そっくりにつくった土器などさまざまな焼き物が出ています。それから織物、こういったものが今残っています。博物館にゆくと嫌というほど見るができます。

そういった時代を横にもってきますと、西暦 300 年、400 年ころです。日本では卑弥呼の時代が終わったころですか。中国では「三国志」の時代です。ヨーロッパではローマの後の方の時代です。

その時代にどうい焼き物があったかという、他の地区では色を使うということはほとんどありません。その点でこのペルーの土器は、世界の焼き物の歴史の中でも特殊な位置を占めているのではないかと思います。誰に教えられるともなく、自然につくって行って上達させていたということが面白いわけであります。

これらの文化が残した遺跡がペルーの北の方ではいくつも発掘中です。毎年、何か新しいものが出てきます。写真は数年前に、大遺跡の正面からレリーフを撮ったものですが、その中には戦争の場面があって、捕虜をつかまえて裸にして歩かせて、踊って、クモに首を切らせて、それを神様に捧げるというような絵が描いてあります。こういった建物の様子がだんだん明らかになってきています。そばに人が立っていますが、比べるといかに大きいかがお分かり頂けると思います。これが 100m くらい続いています。まだその一部しか掘られていませんが、だんだん掘られていくでしょう。

さて、「アンデス文明の起源を求めて」というのが私たちの仕事だったので、50 年前にコトシュという遺跡を掘りにいって、小山を掘っていくと神殿の一角が最後に出てきて、これが 1960 年ですが、ここに手の浮き彫りがあります。1963 年に掘りあげると、こちら側にも一つ手の浮き彫りが見つかりました。

問題はこの建物が出てきた 1960～1963 年頃「年代は一体いつごろか」という疑問がわいてきて、この上にいろいろな建物が乗っていて、それを一つずつ外していくと、上のところで紀元前 800 年といわれていた文化の層が出てきました。ところが他の所で、確かめられていた、いわゆるチャビンといわれる文化が出てきて、これが紀元前 800 年が常識といわれてきましたが、それよりも遙か下に 2 つの時期くらいを抱えて、さらにその下が出てきました。800 年より前というと 1000 年、それより前ということは 1500 年、1800 年、いや 2000 年、つまり紀元前 2000 年ということになると、ペルーでは他の所ではこのような建築物は見つかっていませんでした。まだ作物をほんのちよつとつくり始めた頃と考えていたので、とてもこのような建築物ができるなどあり得ない、そんなに文化が発達しては

いなかったと考えられていたのが、我々の発掘で出てきてしまった。重なりからいって、これは間違いなく古いということであります。土器もまだつくっていない、持っていない。いわゆる無土器時代、あるいは先土器時代でも、このようなこのような大建築があったということです。本来なら農業が出来て、豊かになってきてからこのような大建築ができるというのが定説ですから、それを逆にしたようなことになりました。農業などが未発達でもこういうものができるのだ。「はじめに神殿ありき」だと我々の先生である泉先生は宣言をしまして、それでこのコトシュの神殿、あるいは交差した手の神殿が一躍有名になりました。今日ではペルーの歴史教科書は、この神殿から始まります。

はじめにアジアの方から人が来ます。その後でコトシュの神殿が出来上がってきて、そこから文明はだんだん進歩いたしますという具合に、有名になってしまいました。ペルーの教科書にも泉先生の名前が出ていますし、交差した手の神殿も出てまいります。

それを発見した日本の考古学者ということで、我々はペルーの人たちに尊敬のまなざしで見られています。

ところが最近、紀元前 3000 年以上というのが続々と見つかってきております。近々 NHK のテレビ番組で出るはずですが、そういう遺跡が見つかり始めています。

そうすると、中国の「夏」だとか、古代エジプト文明と、古さの点では肩を並べることになります。肩を並べるといっても、他の文化と比べてどうかというはまだ何とも言えませんが、それでも何か変なものがたくさん出てきております。いずれ日本でもその展覧会をやって欲しいと思っています。

クントウル・ワシ神殿

地図で見ると私どもが掘ったのはどこかということ、ペルーの首都のリマがあって、マチュピチュへ行くのに通るクスコがあって、ナスカの地上絵があって、我々が行ったのはそのワヌコというこの町の近くで、ここでコトシュの神殿その他を掘ったりしました。それから一旦ここを離れて、カハマルカを掘ったうえでクントウル・ワシという遺跡に行きます。これが 1988 年です。山の北半分を掘っていきまして、そのうちに若い人たちが「海岸との関係も調べなければいけない」というので調査が始まってきていて、さらにこちらの方でもまた発見がありました。とにかく、日本の若い人たちはあちこちで大発見をしています。それがこの形成期研究のトップをきっていくような状況になりました。50 人、100 人の作業員を使って、ペルー人の仲間と一緒に、朝から晩までやって、いい成果を挙げています。

そのクントウル・ワシですが、アンデスの西斜面、太平洋の方向に向かって降りて行く途中に、海拔 2300m のところにあります。現在は近くに鉱山ができたおかげで、すばらしくいい道が通っています。飛行場のあるカハマルカの町から 1 時間半で行けます。

山のとっぺんへ行くと、ちょっと掘れば石の壁がごろごろ出てきて、重なり合って複雑

で大変ですが、昔の建物の跡が出てきます。

あるとき、変な穴があって、それを埋めた跡が出てきました。「何だろう」というので調べたら墓だということがわかりました。そこから金の冠もみつかりました。結構大きいものです。六角形の中に人間の顔がぶら下がっている。六角の枠は明らかに竹かごの編み方です。

アメリカ最古の金細工

次の写真は、金細工でできた冠です。冠の中は頭の骨でした。古くて崩れていましたが、それを取り出して冠を外していくと、一枚、二枚、三枚と金の板がどんどん出てきました。いったいどこまで出るのだろうと恐ろしくなるほどでした。そんな中でこのようなマウスマスクのような物まで出ました。上の窪みのところに鼻がきます。唇が隠れるようになっています。



双子のジャガー金製鼻飾り

べつのお墓はもっと浅く、うつぶせになった人物が出てきて、頭のところに冠があって、首飾り、耳飾り、目のところに貝の象嵌がしてあります。

これはヒゲ抜きです。カスタネットのような形ですが、これでパチンパチンとヒゲを抜いていきます。そういったヒゲを抜いている男の姿を描いた土器が、もっと後の時代ですが、出てきています。

これらの形などから年代を調べていきますと、紀元前 800 年前後です。もしかすると紀元前 1000 年くらい、もともとは紀元前 1000 年くらいにつくられたものであって、少し後になってクントウル・ワシに運び込まれてきたというように解釈しているのですが、元々は紀元前 1000 年くらい。金細工でそれ以上古いものは、アメリカ中どこを探してもありません。従って、この金細工は南米あるいは北米を含めてアメリカ最古の金細工であるということになりまして、大きな評判を呼ぶことになります。「最初の金細工にしてはよくできているではないか」と、「この前の段階があってもおかしくないのではないか」という考えもできますが、今のところそういうものは見つかっていません。それが見つかればもちろん

ん、大ニュースになっているだろうと思います。

この金細工が見つかったのは、このクントゥル・ワシ神殿の主神殿の床の下からでした。もともとこの神殿は山全体を3段の石壁で、真ん中に階段をつくって、その前にテラスをつくって、広場があって、主神殿があって、東西の基壇をつくって、後ろの方に円形半地下広場をつくっています。

金は主神殿の下で見つかりましたが、他にもいろいろなところから見ついています。小さな建物の下からお墓が出てきそうな感じがします。図の青い部分はまだ掘っていません。今後掘っていけば、まだまだ出てきそうな感じがします。

これが紀元前800年くらいですが、次の時代にはこれが埋められて、別の建物と広場になる。このようにして紀元前800年くらいから200~300年ころまで、この山は神殿として機能してきたのだらうと思われます。

これらの金細工やそれに伴うものを見ると、実は海岸系の文化です。その一つ前の文化が山系の文化です。そのあとそれらが混ざって。また別な文化になっていく。そのような歴史が広がってきたということがわかります。

村の人たちと一緒に仕事をしているうちに、だんだん交流も深まり「この金をどうするのだ」という話になって、日本で2回ほど展覧会をやって、そのあと資金をいただいてこのような博物館を建設することになりました。今は村の人たちがこれを管理しています。

その後ユネスコの仕事もあり、建物を増やして、いまでは宿泊施設も3つほどつくっています。倉庫兼ラボラトリーもつくっています。朝、下の方からここへ上がってくるとき、朝日を浴びながらその景色を見らるといのは最高に素晴らしい。

初めは埋められた状態にしておいたのですが「昔のおもかげが少しでもわかるようにして欲しい」という要望が強く、それではすべて出して、壊れているところは直そうということにしたのですが、うまい具合に日本がユネスコに預けていた信託基金が使えるということになりました。

例えばこの壁に穴があいていますが、これは上方の建物の地下を通ってくる排水溝のための穴です。こういうものをあらかじめ設計をしておかないとうまく通りません。

壁や階段の横にも側溝があって、水が流れるようになっています。

発掘を進めるほど、紀元前800年という昔の人たちのしっかりしたものづくりがわかってきます。実はまだまだこの下に壁があって、テラスがあって、壁があってテラスがあって、掘り出して見たいのですが、いかんせん、とりあえずお金が終わりましたのでここまです。

村の人たちは毎週月曜日、朝8時から10時まで、10人ずつ交代で、博物館の内外を掃除します。

最近では地方都市からも学生たちが見学に来るようになりました。みな一生懸命に解説をよんだり、写したりしています。パンフレットなどもつくり、私がいれば私も解説します。ビデオも皆さんによく見てもらおうとつくりました。

結論に入ります。

我々がコトシュというところを掘った時に、当時、アンデス文明の始まりは紀元前800年頃このチャビンの神殿ですね、ここから発展していくのだと考えられていました。それが、私たちが掘っていくとそんなものではない、一番古いコトシュの神殿がある、アンデス文明はここからチャビンになって発展していくのだという、こういう大変画期的なことをやったわけです。

その以後に北部の海岸で、その間を埋めるものすごい文化がたくさん出てきてしまいました。コトシュなど比べ物にならない大神殿をつくっていた文化なのです。

我々がクントウル・ワシを掘り出してみたら、その前にひとつ時代があったことがわかってきました、それから先はよくわからない。ところがこっちの北海岸地方には古い大文化が発展していました。これが不思議なことにあるときこれらがみな終わってしまいます。終わると次がクントウル・ワシの神殿や、山の方のチャビンの神殿です。

最近になって、またコトシュと肩を並べる古い神殿が出てきました。いまこれが話題になっております。これはガラルという大遺跡で、これが紀元前2500～3000年と推定されます。「これはもう神殿などではない。都市だ！」と発掘者は言っています。

そうしたらもう一つ、そのすぐ隣で「それもあるけど、こういうものもある」と、大神殿が見つかっています。これはドイツ人が掘っていて、復元されるとこのようになると考えられています。いま、海岸近くの遺跡はこのように、いろいろなものが出てきています。

そこでアンデス文明は「初めに神殿ありき」でいいのですが、あとからでてきた神殿の規模はコトシュの神殿などというものではない。遥かに大きい。では海岸地方では当時食べ物があつたのだろうかという疑問がわいてきます。もちろん、トウモロコシもありますが、イワシの骨がものすごい量で出てきています。「イワシばかり食べていてこんな大きなものができるのか」というと、これもまた疑問です。

そう思っているうちに、日本の若者たちが「私の掘っているすぐ近くでこんなものが出ました」と写真を持ってきました。よく見ると、石の上に泥をぬって、そこに浮き彫りのようにリリーフにしたものが写っています。それが遥か先の方まで続いています。しかし泥ですから壊れやすい。怖くなって、いま手を止めています。保存処置が出来てからでないと掘れませんから。皆さんから知恵をお借りしたいと言っているところです。私はドームを掛けてしまつてはどうかと考えています。そうすれば風や雨に当てないですみます。何かそういう処置をしてから掘った方がいいと思っています。

これが年代でいうと今から 3000 年ほど前です。いま、3000 年前の神殿で、こんなものが残っているのはここしかありません。しかもこれは 1 段目で、もう一つ下があるかもしれません。もしあったら大変ことです。

いま、古い神殿がこの時代（映像）に出てきています。コトシュもそうです。最初はこれしかないと思っていたのが、あとからこういうものが見つかってきたものですから、かつて我々がアンデスの金はチャキンだと言っていたのはこの辺ですが、アンデス文明の金は、もうずいぶん離れて古くなってしまっています。この間を埋めるいくつかの文化も出てきています。

ほとんどが我々日本人が掘って、だんだん海岸の方に行っています。このあたりも日本の研究者がやっていて、いろいろなことが明らかになってきています。

【質疑応答】

Q：(大見 S29) ぜひうかがいたいのは、こういう遺跡を掘り始めるとき、最初は何もないわけでしょ？「そのへんにありそうだ」というのはどうしてわかるのですか。

A：例えば、壁の断片が少し顔を出しているとか。何千年も使われ続けていくと山になりますが、それが不自然な盛り上がりるときは「遺跡ではないか」ということで、表面を歩いて、落ちているものを探します。土器の時代であれば土器片があるはずですが。その土器の模様なりクセなりを見て、古いか新しいかを見分けます。我々が探しているのは大体 3000 年くらい前ですから、そのころの土器の特徴というものがやはりあります。それを見て「それでは掘ってみようか」となります。どのへんを掘るかというのは、歩いてみて見当をつけて「それなら中央部からまっすぐ掘ってみようか」といった判断をします。

Q：(岩田 S35) 今日、ニュースでやっていましたが、マヤには文字があったが、なかなか解読できなかったそうですが、アンデスの遺跡には文字はあったのですか。

A：アンデスには文字がないのですね。文字がなくても何とかおさまったのだらうと思います。そのかわり、道路網がよく発達していて、飛脚が口移しにメールを伝えていたらしいのです。ただ、数だけは必ずしも記憶に頼らないで、数を記憶するヒモを作り、その結び目で数を表すという道具を発明して、それを使っていたようです。

Q：ケチュア語について、その地帯でかなり広範囲で使われていた？

A：インカ帝国というのは、エクアドルからチリまで征服して、わずか 100 年くらいですが、言語を強制して覚えさせた。その言語がいまでも残っています。たぶん、いまペルーの人口が 2000～2500 万人、そのうちの 500 万人くらいがそれを話します。憲法では公用語として使われていますので、クスコの住民はほとんどその言語を話します。アンデス文明

というのは、大小諸文化があったものの総称であって、地方によっていろいろな文化があったのを、最後にインカ帝国が現れて、全体を一つの国家にまとめ上げたと考えられています。

数学の思い出

白石治比古（S41 卒）



子供の頃から本には親しんでいたが、歴史とか文学ばかりで、どうも数理的なものには手を出しにくかった。せいぜいジュールヌの「海底2万マイル」位か。

したがって、算数はできないわけではなかったが、得意でもなく、自発的にガンバるといったわけでもなかった。

絵が好きだったので、幾何学はなんとなく気に入っていたが、パズル的な出題については、いささかだまされたような気分になり、ついていけないところもあった。

戸山高校入試のアチーブメントテスト9科目を合計 810 点台で通過し、ほっとした1年生のとき、数学担当の佐藤忠先生（サトチューのあだ名だった）から、「君達は本当にすごいね。やさしいといっても9科目平均90点近くとらないとここに来れないんだから。要はミスが許されないんだよ。ぼくはきっとできないね。でも数学というものは受験数学じゃないんだ。こう言っちゃっても君達はこれからも受験数学に必死でかかりっきりになるんだろうけど。でも、ぼくはそれは悲しい。できるかぎり本当の数学をやってほしい」と言われてちょっとショックだった。中学3年生のときは本当に受験づけ、アチーブメント対策がすべてだった。でもそれは「本当」ではないって？

友達に聞くと、佐藤忠先生は受験雑誌の発行で有名な旺文社の赤尾社長と仲が良く、何冊も受験参考書を出している上に、テレビにも出て数学を教えている、全く受験産業の上に乗っかっているような存在だという。その人がねえ…。

佐藤忠先生の授業は言葉がハッキリしていて力強かった。僕は1年の夏までサッカー部にいたがサッカー部の先輩から戸山では「佐藤忠信者」がたくさんいることを知らされた。まあ新興宗教みたいなもんかな。

佐藤忠先生の授業は決してやさしくはなかった。問題は一気に数人黒板で解答を書かせ、簡単に解説して次に進むもんだから、あっという間に予習は追い越され、毎日復習ばかりになった。ついに授業の1ヶ月も後から復習で追う形となり自分でも「復習の鬼」になってしまったとなげいた。とくにグラフ作成で「3次式と三角関数の和」のあたりで説明抜きに「各自でやって」のひと言ですつとばされた時は全く途方にくれた。しかたなく、家に帰って一人でスタンドの明かりの下で、計算式に基づきコツコツ方眼紙に交点を記入し

ていった。

長い忍従の果てに、ついに、いままで見た事も無い様な、脈をうった曲線が目の前に現われた。なんて美しいんだろうとしばし呆然となった。丁度その時は夜が白々と明ける午前5時頃だった。

当時から結構ひどい近眼だったので一番前の席で授業を受けていたら、ある日佐藤忠先生が僕のノートをいきなりとりあげてみんなにみせた。「白石はコツコツよく復習している。きれいなノートだ。」

佐藤忠先生はよく言った。「数学の解法は一つじゃない。力任せにやればできることはできる。大学受験にはその方が都合がいい。なんせ時間との勝負だから。でもぼくはそれは好きではない。数学の解法はエレガントなものが一番いい。字もきれいに書け。字がへたかうまいかは問題じゃない。ていねいに書けばよい。ていねいに書いて、ていねいに解け」
数学は美術か、とふと思った。

とにかく、もともと数学は得意ではなかったもので、戸山でも決して数学の点数はよくなかった。2問出題されて時間が無くて1問零点だったこともある。そんな時、佐藤忠先生は僕の片方零点の答案をみんなに見せてこう言った。

「時間が無くて片方は零点だった。しかし片方はしっかり満点だ。2問出されてどちらも手をつけてどちらも出来ないなら本当に合計で零点だ。白石みたいにどっちかしかできないと判断したなら思い切りよく片方は捨ててもう一方を完璧にやれ」数学は潔さかな、と思わされた。

大学受験は結構苦勞した。数学はきらいではなかったが受験ではいつも足手まといだった。

結局早稲田の経済の受験では数学を捨てて、世界史と日本史の歴史二本立てでやっと補欠にひっかかった。

しかし経済数学には本当に悩まされた。ほとんど不可か可の中で唯一優がとれた科目があったが、それはたまたまその教授が裏口入学に関与して辞職する前で、出題が中学生レベルだったから。たぶん、大学を離れるにあたっての、みんなへのお土産だったのだろう。

文系大学卒業生の将来は当然文系。何となく、父のコネで鉄鋼商社の営業マンになった。

当時は電卓が発明されていなくてもっぱら算盤だった。毎日見積計算、価格表作成計算、入金整理計算、とにかく四則演算程度ながら数字から片時も離れる事ができなかった。

そのうち色々あって突然橋梁の欄干の専門販売員にさせられた。売り先は建設業者、PR先は設計事務所や役所の技師、仕入先はメーカーの設計担当とどこもかしこも構造計算、設計計算だらけ。難しくはないけど三角関数は出てくる、代数は出てくる、文字式はしょっちゅうで、すっかり数字づけになった。しかし、戸山時代のことを思っ一切逃げないことに決めた。何とか成るんだから。

気がついたら設計事務所の偉い人に「君いつ技術士とったの？」と聞かれていた。門前の小僧はたまに坊さんよりお経がうまくなるのかもしれない。

佐藤忠先生の教えは、凡才には即効性は薄かったけど、「人生努力すればなんとかなる」ということがまさしくあるんだ、ということを感じさせてくれた。

まあ、色々苦勞は尽きないけど、こうして人生を少し経てみると、努力してその結果に美的なものを見せてくれる、と言う点で数学はとてもいい娯樂だと思う。

だから子供達には遠山啓と安野光雅の「はじめてであうすうがくの本」を買ってやった。

上の息子は数学が得意だったが芸術系の大学にいった。下の娘は絵がうまかったけど物理学を専攻した。でも子供達はお父さんと数学の話はしない。「だってわかんないだろ？」
「結局はあこがれているだけなんだよね」とのことだ。しょうがないね。

妻は英文学専攻だったが、父親が機械工学専攻だったのでなにか説明するときはずぐ図面にしたがる。包丁で「りんごの空中6等分切り」なんてやるのが得意だ。25%引きの商品は元の価格の4分の3というのを妻に教わった。

その妻が是非見たいと言ったのが小川洋子原作の「博士の愛した数式」のビデオ。借りてきて、二人で見た。そうか、「不倫」も数式にできるんだ…。

城北会千葉支部会誌 第8号

平成 23(2011)年 11 月発行

発行：城北会千葉支部

支 部 長 齊藤 徳浩 (S32)

副支部長 堀口俊一郎 (S32)

副支部長 岡田 光正 (S35)

顧 問 尾崎 英二 (S31)

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚 270-25

本橋 輝明 (S34)

電話 090-6021-7393

E-mail:mteruak@attglobal.net